

(4) ②様式第4号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI /12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院等	実施機関名・連携機関名 南九州プラットフォーム（鹿児島大学・熊本大学）
コラボ研修プログラム	テーマ：「ミドルリーダーのマネジメント能力育成プログラム」
支援事業報告書	研修等名：【NITS・南九州プラットフォーム（鹿児島大学・熊本大学）コラボ研修】 「ミドルリーダーのマネジメント能力育成プログラム」
	開催日時：令和3年12月26日、27日、28日（9:00-16:30） 開催場所：鹿児島大学（鹿児島県鹿児島市郡元 1-20-6） 参加人数（総数）と参加者の属性 延べ人数：157人 1日目受講52人、2日目受講48人、3日目57人 実人数：59人（1日間受講21人 2日間受講14人 3日間受講24人） 鹿児島：教職大学院16人、校長1人、教頭6人、教諭14人、教セ職員1人 熊本：教職大学院2人、校長3人、教頭3人、教諭12人、教委職員1人 （鹿児島大学スタッフ12人、熊本大学スタッフ2人）
内容：	南九州プラットフォームが、過去3年間、教職員支援機構と実施してきた合同セミナーの成果を活かし、両大学の教職大学院生と鹿児島県・熊本県の教育関係者を主な対象として学校組織マネジメントの理論を身に付けさせるとともに、地域の教育課題を解決し、各学校・地域で活躍できるミドルリーダーに必要とされる力量形成を目指して「ミドルリーダーのマネジメント能力育成プログラム」を実施した。
1日目：12月26日（日）	講義 1「鹿児島の公立学校の現状と課題について」（鹿児島県教育委員会 堀之内尚郎 教育次長） 鹿児島の教育の現状について、自作の資料を提示し、不登校やいじめについての認識、その対応方法などについて学校職員に求められる責任を法的な根拠を示しながら説明された。 講義 2「2021-学校教育の教育法化現象を考える-訴訟リスクの高まりと学校経営」（日本女子大学 坂田 仰教授） ①価値観の多様化の中で、学校を取り巻く環境が変化し、公教育を支える公理が揺らいでいる②学校教育の法化現象が進行し、学校を舞台に権利の衝突が顕在化している③裁判例を分析し危機に備える視点で教員に求められる教育法規・危機管理の重要性についての丁寧な解説が行われた。 講義・演習 3・4「学校の組織力と教師のエンパワメント」（筑波大学 浜田 博文 教授） 学校における自律性と協働性がこれまで以上に必要になっており、そのためにも共有ビジョンの重要性が認識されるべきで、その決め手は教員のエンパワメントであることを基軸に具体的な資料を提示して解説された。特に、学校の持つ組織文化、課題解決のためのダブルループ学習、多方向コミュニケーションによる教師のエンパワメントと共有ビジョンの形成などについて再認識できる内容であった。
2日目：12月27日（月）	講義 1・2「ソーシャルキャピタルと地域の教育活性化」「教職員の働きがいと幸福感を高めるリーダーシップ」（愛媛大学 露口 健司 教授） ソーシャルキャピタルについての理論的背景を踏まえ、学校、校区、関係機関とのつながりを高めることが教育効果を高めること、マネジメントとリーダーシップの関係、幸福感を高めるリーダーシップなどについてデータをもとに具体的に理解することができる内容であった。 講義・演習 3「チーム学校による生徒指導」（鹿児島県総合教育センター 瀬戸口 信一 教育相談係長） いじめ及び不登校を中心に児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果をもとにそのポイントを確認するとともにチーム学校による生徒指導を実現する方策として、鹿児島県総合教育センターが開発している「学校楽しーと」の活用、インシデントプロセス法による事例研究等について具体的に理解できる内容であった。 演習 4「特色ある教育活動の事例報告」 喜界町立早町小学校松岡 高史教頭が、総合的な学習の時間を中心にした教育課程のあり方について、志布志市立志布志中学校長 元 武彦校長が、全校体制で取り組む道徳教育について、西之表市立種子島中学校 柏木 昇校長が関係機関との連携を図ったキャリア教育の推進について事例を報告した。各事例を通して職員の同僚性、協働性と共有ビジョンの必要性について理解を深めることができた。
3日目：12月28日（火）	講義・演習 1「教職員のメンタルヘルス」（明治大学 諸富 祥彦 教授） 職員間のコミュニケーションの必要性を理解するために、小グループの中で自己開示、他者受容ができる活

動を繰り返して行った。相談上手になること、同僚に相談される人になることの必要性などについて分かりやすく解説され、職員室を和やかで明るく、気軽に話せる場にしてほしいとのメッセージがしっかり伝わる内容であった。

講義 2「同僚性を高めるコーチング」(神田外語大学 嶋崎 政男 客員教授)

3つのC (Counseling mind Collegiality Collaboration) を大切にして職員集団をまとめていくミドルリーダーの役割を教育現場の具体例を示しながら、分かりやすく解説された。同僚性を育む中堅教員・管理職の基本姿勢について具体的に理解することができる内容であった。

演習 3・4 シンポジウム「教育実践を通して教師のあり方を省察する」

鹿児島市立伊敷中学校山口 優子教諭、鹿児島市立西紫原中学校坂口 洋幸教諭、阿久根市立尾崎小学校山口 小百合教頭、与論町教育委員会児玉 拓世参事兼指導主事が事例報告を行った。鹿児島市立八幡小学校下古立 浩校長、鹿児島県総合教育センター奥山 茂樹企画課長が、管理職、教育行政の立場からコメントを行った。本学教職大学院修了生によるシンポジウムであり、教職大学院修了者が、学校のミドルリーダー及び管理職等として教職大学院の学びをどのように活かしているか、受講者が近い将来の自分の姿と重ね合わせて事例報告を聞くことができる内容であった。

成果：3日間の研修終了時に講義内容に関するアンケートを実施した。大変役だった4～役立たなかった1の4段階評価の平均値は次の通りであり、受講者にとって大変役立つ内容であったことが分かる。

12月26日 講義1(3.4) 講義2(3.9) 講義3(3.9) 講義4(3.9)
12月27日 講義1(3.8) 講義2(3.8) 講義3(3.4) 演習4(3.8)
12月28日 講義1(3.8) 講義2(3.7) 演習3・4シンポジウム(3.6)

以下、感想をいくつか紹介するが、Zoomを活用した研修の有効性や全国的に著名な講師、教育行政関係者、管理職、中堅教諭等として活躍されている多くの方の講義や実践報告などを交えたことで、今後の自身の教師としてのあり方、学校のあり方を真摯に見つめることができたのではないかと思われる。

- ・鹿児島教育について改めて見直したり、これまでとは全く異なる視点で法と教育の関係を考えたりすることができました。また、浜田先生のお話は事前に書籍を読んでいたこともあり、大変印象に残りました。
- ・教師の独立性と組織との間で、中堅教師として不安を抱えていましたが、道標をえたように感じました。
- ・学校組織や授業に関して学ぶことが多いが、学校内外の人々や組織のつながり・関わり、ソーシャルキャピタルについて学ぶことができたことは、大きな意義があった。また、様々な立場や県外の方々との交流は大変多くの学びがあった。
- ・ミドルリーダーとして大切なこととしてどの先生方も共通していたことはコミュニケーション力であり、学校組織を活性化していくためにめには、教師の同僚性や協働性が大切であること、そこを目指した共有ビジョンを管理職とともに丁寧に語り、理解を図っていくことが大切だと思いました。子どもの力は、私たち一人一人の教師の力が影響を与えることを肝に銘じて今後も学び続ける教師でありたいと思いました。
- ・組織がより良く機能するためにも同僚のメンタルヘルスにも気を配ることが不可欠である。同僚性を高めるコーチングを効果的に活用しながら、お互いが弱音を吐きあい、協働で乗り越えていけるような関係性を構築できるように組織へ参画しなければと強く思うことだった。更に、教職大学院修了生の事例発表に圧倒された。高い志、バイタリティに感服した。自分の今の学びがどこまで焦点化され、独りよがりになることなく、学校、子ども、地域のためにできるか不安が大きい。当然自分一人では何かができる、変えられるということはないので、組織として取り組むことができるように同僚との関係性を構築できるように努めていきたい。
- ・離島の地理的な制約がある環境にあります。このように学習する機会を得て、大変刺激になりました。

アイデアや工夫したこと：本年度、鹿児島大学が実施担当校として、本コラボ研修を企画したが、熊本大学とも連携して運営を行うことができた。以下、本年度の工夫点を挙げる。

- ①教職大学院の授業で取り扱っているテキストの著者を講師とする努力をした。
- ②鹿児島県教育委員会との連携の下、鹿児島県の教育課題等を重点的に理解できるようにした。
- ③ミドルリーダーとしての具体的なイメージを確立するために、学校の管理職の立場からの実践報告、中堅教諭としての実践報告を多数組み込んだ。
- ④コロナ禍での運営、離島を多く抱える鹿児島県の地理的特性を考慮した遠隔方式での運営を行った。

<写真・図など> ※会場の熱気や規模がわかる写真、参加者の表情がわかる写真(寄って撮影またはトリミング)を撮影してください。



浜田教授講義画面



露口教授講義画面



嶋崎教授と受講者



シンポジウムの様子